

# 「しか」は係助詞か

半藤 英明

一、はじめに

係助詞・副助詞の類を所謂「とりたてて助詞」または「とりたてて詞」として把握する論の登場（「とりたてて助詞」と「とりたてて詞」は、ほぼ同一のものである）は、係助詞、副助詞に属する個々の助詞の在り様を再検討する契機となつたように思われる。そのような中、現代語助詞「しか」は、副助詞と見られていたこともある（例えば、学燈社『古典語助詞助動詞詳説』548頁、阪田雪子執筆<sup>①</sup>）が、近年では、とりたてて助詞やとりたてて詞、或いは、係助詞とされることかしばしばである。例えば、寺村秀夫（一九九一）、中西久美子（一九九五）ではとりたてて助詞、沼田善子（二〇〇〇）、庵功雄（二〇〇一）ではとりたてて詞であるが、木田敦子（一九九八）では係助詞である。もとは、山田孝雄（一九三六）が「しか」を係助詞としている。森田良行（二〇〇二）は、一般論としながら、係助詞として「は

も／こそ／さえ／でも／しか」を挙げている（46〜47頁）。此島正年（一九七三）によれば、「しか」には体言性がなく<sup>②</sup>、その点で「しか」は副助詞の中でも最も係助詞に近いものである（258頁）。即ち、副助詞と扱うにしても係助詞性が指摘されてきたことは、「しか」の識別には難があつたということである。助詞の分類には個別の判断基準があることから、上記すべての見解を同列上に扱うことはできないが、それにしても、分類上の所属が定まらない状況は好ましいことではない。

助詞の分類上、「とりたてて詞」と「係助詞、および、副助詞」は並立し得ない。それは、宮地朝子（一九九九）が『とりたてて詞』というカテゴリーはこれら（略）の助詞群の機能の共通性に注目し、『とりたてて』として一括したものであり、係助詞と副助詞の区分は不必要とする立場をとる（51頁）とする通りである。そこで、本稿では、ひとまず「しか」を係助詞と認定し得るか否かということを中心

的問題として考察する。が、そのことは、当然に、係助詞、副助詞が如何なる助詞であるかを反映するものとなる。

## 二、構文上の在り様

従来、「しか」は、他の副助詞との比較で論じられることが多く、単独で取り上げられることは少なかった。それは、この助詞の意味・用法が限定的であり、理解がそれほど難しくないと考えられてきたことに因るものと思われる。

### 1 可能性は、ふたつしかない。

(井上章一『美人論』)

2 いまはもう「人間としての生き方」という問いかけが自分にはないんです。

(西部邁・栗本慎一郎対談『立ち腐れる日本』)

ともに、文意は「ふたつ」「人間としての生き方」という問い以外のものを否定するものである。述部には形容詞「ない」を配している。このように「しか」は「特定の事物以外のものを全く否定」し、「常に必ず否定の語と呼応して用いられる」ものである(秀英出版『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』、59頁)。即ち、意味・用法は、一つに限定される。

構文上の出現位置に特段の限定性は見られない。「しか」

の上接語は、体言、連用成分、動詞、助動詞のように多様である。以下に、格助詞・接続助詞「て」・副助詞に下接の例(3〜7)と、動詞・助動詞に下接の例(8、9)を挙げておく。

3 やはり、深尾の結論が、どこかおかしいのだ。この一面をしか、物語っていないのである。

(『美人論』)

4 ……それを取りまとめられるチャンネルは、お館さまとしての信玄にしかなかった。

(『立ち腐れる日本』)

5 しかし他人は、結局は正面からしか見てくれないんですよね。

(同)

6 ですから、戦後処理の金のことについてしか考えたくないというのなら、それでもいいんです。(同)

7 現在の日本人は、日本の文明の行く末については、ひたすらなる飛翔状態だけしか想像できないのだと思います。(同)

8 ということは、もうあの悲恋の中に身も心も焼きつくしてしまった穂積には、恋などする力はなくなくて、わが娘のごとき少女をいつくしむしかなかったということであろう。

(中西進『神々と人間』)

9 自分の語っている対象を愛そうとする気持ちも、

信じようとする思いもなしに、それについてなにごとかを語る、自分に關心のないものについて語るといふのは、やはり退屈しのぎでしかないと考えます。

『立ち腐れる日本』

また、単文・複文を問わず、連体句内(10、11)・条件句内(12、13)にも使用される。

10 けれども、義務でしか<sup>3</sup>ないものを権利と錯覚し、喜び勇んで投票場に行く、「女」たちというのはそういう代物なんです。

『立ち腐れる日本』

11 こう言う自分のことしか<sup>3</sup>考えない人間に、生徒が反感を持つのはとうぜんのことである。

〔斎藤喜博『君の可能性』〕

12 表面的なつきあいしか<sup>3</sup>しないから、容姿でえらん<sup>3</sup>でしまふ。

〔美人論』〕

13 個人だけでは、どんなに努力しても、五の力を五<sup>3</sup>だけしか<sup>3</sup>出すことができないが、学校では、五の力を十にした<sup>3</sup>り十五にした<sup>3</sup>りしていくことのできる<sup>3</sup>ところである。

『君の可能性』

このように「しか」の上接語の在り様は、多くの副助詞のものと大差なく、また、厳格な構文規則が存在するようにも見えない<sup>3</sup>。連体句内・条件句内にも収まる出現位置の

自由度の高さは、この助詞が構文的関与よりも意味的関与を強くするものであることを思わせる。

但し、格助詞や他の副助詞が下接することはなく、否定語もしくは形容詞「ない」と呼応する形式(以下、「しか…ない」形式)が厳然と保たれる。<sup>3</sup>「しか」構文は、その形式でなければ構文的にも意味的にも成り立たず、非文となる。「しか」の用法は、その形式を作ることが構文成立の絶対条件であり、そのことは、副助詞の在り様としては特殊である。

歴史的に見ると、「しか」の文献上への出現は近世後期の江戸語とされるが、当時から既に否定語を伴う表現形式であり、文の形式は拘束的であった。即ち、「しか」の用法は、発生当時から今もって変化していないということである。

### 三、「しか…ない」形式の拘束性

宮地朝子(一九九七)・(二〇〇〇)は、「しか」が係助詞であることを歴史の変遷や方言からの検討を視野に主張する。その主張の中心には、近世に成立した(其他否定)の意味機能を持つ「〜シカ…ナイ」構文が格助詞や他の副助詞に下接することを以て係助詞の構文的特徴とすることがある(左25〜26頁)。同じく「しか」を係助詞とする前掲諸

説にも、同様の認識がある。

しかし、そのことは「しか」の助詞としての在り様を保証するものではないと思われる。例えば、古典語「だに」には格助詞・副助詞が下接しないが、なれば、「だに」は係助詞である、ということにはならない。格助詞や副助詞への下接が必ずしも係助詞の構文的特徴であると絶対視することはできないように思われる。現代語「こそ」と他助詞との相互承接も、「だけ」「ばかり」のような副助詞のものに近いものであるが、「こそ」に「取り立て」機能が認められ、また、連体句内の主語に付きにくい等の構文的制約があることを考慮すれば、係助詞と判断すべきものとなる。助詞の相互承接の状況が必ずや助詞の在り様を規定するものではなく、「しか」の場合にも、より広範で総合的な判断が必要なのではないか。

助詞の相互承接は、それぞれの助詞の機能を完全にしないものではない。即ち、格助詞や副助詞に下接すれば、必ず係助詞であるということにはならない。「しか」の場合、格助詞・副助詞に下接する理由が係助詞云々とは別の問題として論じ得るということがある。

浅見佐久江(一九五七)は、「文中でいかなる機能を託されようと同一の言語形式をとる以上、これらは何らかの共通性がある筈」としつつ、「格機能などは比較的固定的で、

これが託される語は(接続助詞を除けば)他の機能を負うことは殆どない。一方、準体、副、係の諸機能などはかなり融通性がある」(10頁)とする(具体例としては、城田俊(一九八七)が副助詞に形式体言(例文③が相当)・接尾語(例文④が相当)・とりたて助詞の三機能が具っているとすること等がある)。助詞の機能が必ずしも固定的でないことは、用法上の個々の事例に於いて様々な可能性が有り得るということである。例えば、助詞の複合の事例では、下位の助詞の働きが上位のそれに優先することがある。

①家にもち帰り、妻の目から隠れて読みながら、あの瑞々しい細君の寝室での姿態をあれこれ悩ましく想像したものである。(森村誠一『死を呼ぶ天敵』)  
②神楽の庭では火を焚くものだから、燃えさかる冷泉院の火を上皇の神楽に焚く庭火に見立て、それにしても猛烈な庭火だなあ、と洒落たのである。

(渡辺実『大鏡の人々』)  
③『大鏡』は安子は決して強いだけの女性ではなかった、と弁護の言葉を添えている。(同)

④人の思いが叶うも叶わぬも宿世、人が意志することすらが宿世と、人はどうにもならぬものに嘆息するのであった。(同)

⑤今は、家族こそが子供のしつけ・教育の責任を担う

べきだという社会のしくみになった。

(広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』)

①の場合、「で」の格機能は下接する連体助詞「の」により制限され、その「で」は場所の情報を表す意味的な役割にのみあるように見える。②では、「神楽の庭で」の部分が発用成分として述部にかかつていく筈ものであるが、下接の「は」により題目化する。「で」の働きは、やはり意味的なものに制限されているように思える。③でも、「だけ」の関係構成の機能は下接する「の」の存在により不要となり、意味的な役割を保存して準体機能化している。④の「すら」が準体機能化しているのも、「が」の下接により格機能の内部に組み込まれたことに因るものである。⑤は、本来ならば係助詞として「取り立て」機能を發揮するはずの「こそ」が、下接の「が」が客体的関係構成を表すものであることから、卓立の意味的側面を担う役割にのみ甘んじていることが考えられる。いずれも、下位の助詞により上位の助詞の機能が制限され無力化するケースの類と考えられる。梅原恭則(一九八九)でも、助詞の相互承接で承接順位の下のものの機能が勝る旨の記述をしている(305〜306頁)。

そのような事例から見れば、助詞の承接順位を絶対的なものとすることは危険であろう。助詞の承接順位がそれらの助詞の機能の全てを反映してるとばかりは言えず、

「しか」の用法についても、個別的な論理を考える余地はあるものと思われる。

思うに、「しか」が格助詞や他の副助詞に後接する理由は、常に否定語、もしくは、形容詞「ない」を伴うことに関わるものと推察する。梅原恭則(一九七三)によれば、限定の意を表す副助詞の機能は主体的関係構成を表すものであるが、構文中に「しか」単独の形があり得ないことからすれば、「しか…ない」形式は形態的に極めて強固であり、この形式こそが主体的関係構成を表しているものと考えられる。仮に、その形式に格助詞や他の副助詞の介入を許せば、前掲①〜⑤のケースのように、「しか」の働きそのものが制限される可能性や、述部に配される語の広がりや許容することに繋がるものが予想され、「しか…ない」形式の崩れる可能性がある。「しか…ない」形式が構文成立の条件である以上、この形式を妨げる状況は不都合であり、排除されなくてはならない。つまり、常に「しか…ない」形式を保つため、「しか」は格助詞や他の副助詞に下接するのである。泉谷双蔵(二〇〇一)では、「しか」句はどの位置にあるかと所謂「焦点」になり得るとした上で、「つまり『しか』句が動詞の直前にない場合や同一の文中に『焦点』が二つあるときは、文は非文となる」(39頁、傍線筆者)とするが、これも「しか…ない」形式の堅固なることを述べたもので

ある。

以上、「しか」が格助詞や他の副助詞に後接することを以て係助詞と判断することへの疑問を提示した。

#### 四、「しか」の係助詞性

係助詞「は」は、「主題―解説」という題述構文を作る。同じ係助詞の「も・こそ」は、「は」の題述構文そのものとはいれないが、表現性としては、かなり近似的な構文(主題的構文)を作る。しかし、そのようなものを「しか」は作り得ず、「しか…ない」形式の多くは「…は…しか…ない」の形で題目語の述部を形成している。

14 そして難民の流入する場所は日本しかない。

〔立ち腐れる日本〕

15 僕は、人間というのは言語至上主義者でしかありえない、言語的動物でしかありえないと思う。(同)

16 じつはこれは、これまでまともに政党と言えるものは、かりそめにも自民党しかなかったということ  
を意味している。(同)

17 孫権のこの構想はしよせん画にかいた餅でしかなかった。  
(竹田晃『三国志の英傑』)

18 惜しむらくは、曹操自身の文章はごくわずかしか

伝えられていない。(同)

19 学校はその程度の重みしか持っていなかったのである。  
〔日本人のしつけは衰退したか〕

20 しつけや教育というものは、しよせんその程度のものでしかない。(同)

21 温室育ちとしては、はじめて経験する挫折への対応は、それしかなかったのだろう。〔大鏡の人々〕

22 院の本性はやはり、正常からの逸脱、という所に求めるしかないであろう。(同)

23 かしこくなければ、「女はプスにしか見えない」。  
〔美人論〕

次は、「は」と「しか」の位置関係が倒置的になっているが、同様の事例である。

24 鳴き声ていどの音声しか王子は発しなかった。  
〔神々と人間〕

25 つまりは姦通のなかにしか、性愛は存在しないと  
いうのが、騎士道の習慣であった。

26 だから、結局、光源氏の行動様式を、今日の立場  
からは認しようとすれば、宣長風の道徳的自然主義

をとるか、時代による精神的価値の相対的変化という、歴史主義の立場をとるしか、方法はないだろう。

(同)

いずれも「王子は鳴き声でいどの音声しか発しなかつた」「性愛は姦通のなかにしか存在しない」「方法は歴史主義の立場をとるしかないだろう」の形に置換して見れば、例文14と23と同様に「は」の述部を形成する構造となる。

他にも、「は」の述部ながら「しか…ない」形式が連体句内に収まっているもの(27、28)や、「では」「には」と関わるもの(29、30)、「は」ではなく「も」の述部であるもの(31)、主格「が」の述部となるもの(32)もある。いずれも、「…は…しか…ない」形式のバリエーションに位置付けられるものと思われる。

27 やはり、「美人排斥論」は、当時でしか有り得なかつた議論なのだ。  
〔美人論〕

28 私はその媒介項というのは、トレードイション、つまり伝統としか言いようがないものだと思うんです。  
(同)

29 — そんな声しか日本では聞くことができない—  
〔立ち腐れる日本〕

30 この世のなかには一度しか生まれてこないのだから、どんなにのろくてもよいから、あせらずにじみちちに努力をして、悔いのない自分の生涯をつくっていくほうが得なのではないか。  
〔君の可能性〕

31 彼らには、神もまた人間の中にしか存しないのだ

という確認があつたはずである。〔神々と人間〕

32 その時、道長は「男が妻をひとりしか持たない」ということがあるものか」と、頼通を叱りつけた。  
〔色好みの構造〕

このように、「しか…ない」形式が主述関係の中の述部の方に配置され、しかも多く題目語の述部を形成していることは、「は・も・こそ」の係助詞全般が積極的に主語の位置に立つことからして、この形式が係助詞構文のものではなく、副助詞の在り様にあることを示すものとなるのではないかと思われる。副助詞には、題目語の述部を形成する例がごく当たり前に見られる。

33 教師はただそれを発表しているだけである。

〔君の可能性〕

34 先生は学生を心配して、そんなことなど考えずに、むちゅうで電車にとびついていったのだった。(同)

35 これは揶揄ですらないのではあるまいか。  
〔大鏡の人々〕

このことは、「しか」の係助詞性の問題と関わる。尾上圭介(一九八二)は、「係り結びの形態的呼応が消滅した現代語においてもなお、『は』は係助詞である」とし、「は」の係助詞性が「他の並行的事態への関心を含む」という係助

詞としての意味の個性（分説性・排他性）と、係助詞が係の位置に立つことによつて前後両項の關係構成に働くという（二分結合）と」にあるとする（117頁）。私見によれば、「は」の係助詞性である「他の並行的事態への関心を含む」という意味の個性と、「係りの位置に立つことによつて前後両項の關係構成に働く」という機能的側面とは、係助詞の「取り立て」機能に関わるものである。

「取り立て」は、係助詞がその上接部と主に述部との二項を意味的・構造的に特化する操作である（これが尾上の「前後両項の關係構成に働く」ということである）。その操作が絶対的なものとなるか、或いは、他項との關係性を持つ相対的なものとなるかにより、主題、対比という用法上の區別が生ずる（これが尾上の「意味の個性」ということである）。「取り立て」の対象たる直接の要素が係助詞の前後「二項」であることから、係助詞の対比の用法（他項との關係性を持つ相対的なもの）で通常、二項同士の対立的、もしくは、並行的な關係が表出する。

「は」

・暗闇に神は行動しうるが、人間は行動することができない。  
〔神々と人間〕

・右の文章でも、「仏法」と「神道」は対応しているけれども、「儒」は対応していない。（同）

「も」

・わが意に従うことにおいて、対象を語ることもでき、またわが感情を訴えることも可能になるだろう。（同）

・鳴き声も聞こえず、妻の声もしないというのである。（同）

「こそ」

・礼儀作法もしきたりも、村の中でこそ通用するが、都会などの村社会の外ではまったく無力なものであった。（『日本人のしつけは衰退したか』）

・もちろん、ここでは、聖徳太子という名は、聖者の象徴的人格でこそあれ、必ずしも彼個人の人格を意味するのではない。（『神々と人間』）

そのような観点からすれば、「しか…ない」形式が右のような対比構文を作ることとは、実例としては、まずない。それは、「しか」が「は」「も」「こそ」と同じ働きにはないこととの現れである。「しか」による同様の対比構文の作例（次例）は可能であるが、その構文の形成に「しか」の働きが直接関与するものではないと考える。

・ここには、男しかおらず、女はいない。

・ところで、「しか」が常に否定の語と呼応するという構文上の絶対条件は、それらの關係性がイデオムのであるこ



とを窺わせる。「しか」を使えば、常に否定語を伴わないと文意が成り立たず非文になる、という様は、形式的・意味的規則性を破れば文意を損なうというイデオロムの在り様である。「は」「も」「こそ」の前後二項の自由度と較べれば、「しか…ない」形式が同様の「取り立て」にあるとは考えにくい。

そこで、係助詞の「取り立て」が前後二項の意味的・構造的な特化に働くのに対し、「しか」の前後二項は、まずもって意味を成り立たせるための要素であると、この両者が全く別の働きにあると考える。「しか」の前後二項が「取り立て」の要素である前後二項には相当せず、「しか」に「取り立て」機能を見出し難いことは、この助詞を係助詞とはしない判断へと向かわせる。

##### 五、「しか」の意味的限定

「しか」による「限定」は、副助詞の範疇のものと考えられる。「しか」の「特定の事物以外のものを全く否定する」という意味的役割は、特定の事物を限定し、それ以外を否定するものであるから、当然のこととして文意に対比的含みを生じさせるが、様々な事例を検討すると、「しか…ない」形式と、そこから生ずる対比的含みとの対応には、明確な

ものと曖昧なものがある。次例は明快なものである。

⑥ この魚は、私しか食べない。

この文は、「この魚は、私だけが食べる」の意であるから、対比的含みは「他の人は食べない」のようなものである。しかし、次例のような場合では、そのような明確な対応が考えにくい。

⑦ この魚は、私が食べるしかない。

理論上から辿ると、⑦の「しか」は「私が食べる(こと)」を承けるものであり、「それしかしない」というのであるから、対比的含みとしては「他の人が食べることはない」となる。が、それは、結果として「他の人は食べない」ことであるから、「私が食べるしかない」の対比的含みが「他の人は食べない」であると解されることがあり得る。⑦の対比的含みを「この魚は、他の人は食べない」と受け取る可能性が否定されるものではないだろう。しかし、⑥⑦は同義ではない。⑦の文意は「魚は、私が食べなくてはならない」というものでもない。「魚は、私が食べるより仕方がない」というものであり、⑥には見られないニュアンスがある。つまりは、⑥と⑦とは別の対比的含みを取るべきものであるのだが、前述のように⑥と⑦の対比的含みを明快に区別することは難しい状況がある。

もつとも、実際問題としては、⑦の対比的含みの存在は

気にならない。文意として「魚は、私が食べなくてはしょうもない」「魚は、私が食べるより仕方がない」というところが認知されれば十分であると思われる。それは、⑦が文意に付随する含みを殆ど問題としていないということである。山口堯二(二〇〇〇)は『しか』による限定には当の事柄とその他との対照的な関係があらわになるだけ、その上接する事柄の限定の仕方は論理的・分析的であり、したがって、表層における間接性にもかかわらず、情意的にも当の事柄を『だけ』よりかえって強く限定する働きを感じさせる」(207〜208頁)と指摘しているが、「私が食べる」しかない」の場合には特別なニュアンスが醸成され、文意はそのことの表明に重きが置かれるため、対比的含みが殆ど問題とならなくなることが考えられる。次例も、やはり対比的含みが問題とされにくいものである。

- 36 一つ一つの表現の要素は、それぞれなんらかの機能を一つしか持たないということはない。

(南不二男『敬語』)

- 37 もし無常観や運命観が平家物語の生命であり、財産であるとするならば、この時代に沢山の平家物語のような作品がつけられてもよさそうなのに、なぜ一つしか出なかつたのだろうか。

(石母田正『平家物語』)

このように「一つしか持たない」「一つしか出なかつた」の表現では、対比的含みが発想されにくい。これらの文意は「一つだけ持つ」こと、「一つだけ出た」ことをネガティブに表現することが本意であり、36の「なんらかの機能を複数持たない」こと、37の「作品が複数出なかつた」ことのような背後の含みは、必ずしも想定される必要がない。それらは、あくまで結果分析的なものである。沼田善子(二〇〇〇)では『しか』は、自者について明示的に主張するけれども、それは『だけ』など他のとりたて詞のように素直な主張の仕方ではない。あらかじめ前提とされる集合から他者を引き出すための手段として自者を明示するだけである」(192〜193頁)としているが、このように、「しか」には意味的に対比的含みには依存しない用法があると見られる。寺村秀夫(一九九二)は、「XハP」に於いて「談話の場面では、Xだけが話題になっていることがはっきりしているときは、(略)、対比の影は消されてしまう」(67頁)としているが、これは、間接的には限定の用法に対比性を問題としないケースがあることを述べたものである。

対比的含みに確定的な存在が保証されないことは、「しか」：「ない」形式から生ずる対比的含みが結果論的なものとして把握されるべきことを示すものである。半藤英明(二〇〇三)で述べたように、対比的含みが結果論的なもの、

つまり意味的整合性の問題であるのは、副助詞の用法に関わるものである。伊藤智博（一九九五）には、『ばかり』による限定表現というものは『ばかり』そのものの本質的機能ではなく、本質的な機能がはたらくことよって対立する他のメンバーの存在が現実世界で薄くなるため、あたかもそれらが排除されたように解釈できるというだけのことである」（左25頁）とあるが、「ばかり」の対比的含みにも結果論的などころがあるということである。<sup>11</sup>

上述のように、「しか」は、構文内での意味的限定に働く副助詞の役割にあり、対比的含みを積極的に担う係助詞の働きにはないのである。

## 六、結び

近年では係助詞とされることも多い「しか」は、副助詞である可能性が高い。それは、主に次の三点の理由に因るが、それらは、いずれも「しか」が係助詞の「取り立て」機能を持ち得ないことに関係するところである。

I 「しか」は、その前項・後項が対立・並行する形で  
の対比構文を作らない。

II 「しか」には主題の用法がなく、題目語の述部を形成する例が極めて多い。

III 「しか」の使用に伴う対比的含みは、結果論的なもの、意味的整合性に関わるものと考えられる。

助詞の分類上のカテゴリーは、研究者によって異なるどころがあり、必ずしも統一的ではないが、特に個人的な分類に依らない限りは、用法上の分析を以てカテゴリーを議論することが可能である。本論と異なる立場はあっても、本論が極端に突出したものと判断されるものではないであろう。

注1 阪田は、明治書院『日本文法大辞典』では「係助詞」とする。

2 城田俊（一九八七）は、「しか」が接尾語の機能を有してはいないとして「不完全副助詞」とする。41〜42頁。

3 不特定を指示する名詞（なにか、だれ、等）には付かない。寺村秀夫（一九九二）142頁。

4 寺村秀夫（一九九二）では「結びに一定のかたちを要求する、古文の係結びのきまりを保持しているのは、現代語ではこの『シカ』だけである」（144頁）とするが、「しかない」形式が古典語の係結びとの共通性を持ち得ない（例えば、特定の活用形を要求してはいない）ことから、これを係結びとはしない。

5 例えば、山口堯二（二〇〇〇）参照。

6 半藤英明（一九九六）32〜33頁。

7 半藤英明（二〇〇三）参照。

8 但し、城田の形式体言・接尾語の機能は、準体機能として括れるものと思われる。

9 梅原恭則(一九七三)は、助詞の準体・並立・格・接続の「職能」が客体的関係を構成し、副・係・終止・間投が主体的関係を構成するとしている。34頁。

10 係助詞の用法にも、「ものあはれは秋こそまされ」(徒然一九段)のようなものがあることから、このような表現形式の存在を以てカテゴリーの断定・確定をすることはできない。

11、伊藤は、「だけ」は「マークするメンバーを『限定』、対立するメンバーを『排除』する機能を備えている」(左26頁)とするが、「だけ」と「ばかり」の機能を区別する理由については説得力があるとは言えない。

#### 参考文献

- 浅見佐久江(一九五七)「助詞の機能のあらわれかたについて—相互承接と分類—」『女子大国文』第6号
- 庵 功雄(二〇〇二)『新しい日本語学入門』(スリーエーネットワーク)
- 泉谷 双蔵(二〇〇二)『『しかく』ない』構文について』『名古屋学院大学外国語教育紀要』31号
- 伊藤 智博(一九九五)『『だけ』『ばかり』の限定』『日本語学文学』(三重大学)第6号
- 梅原 恭則(一九七三)「副助詞の構文的機能と助詞の機能の系列について」『国語学』第95集

(一九八九)『講座日本語と日本語教育 第4巻』

助詞の構文的機能(明治書院)

尾上 圭介(一九八二)『『は』の係助詞性と表現的機能』『国語と国文学』第58巻第5号

語と国文学』第58巻第5号

木田 敦子(一九九八)「係助詞と副助詞」『東京女子大学日本文学』第89號

此島 正年(一九七三)『国語助詞の研究 助詞史素描』

(桜楓社)

城田 俊(一九八七)「副助詞について」『国語国文』第56巻第3号

寺村 秀夫(一九九二)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』(くろしお出版)

中西久美子(一九九五)『日本語類義表現の文法(上) 単文編』(シカとダケとバカリ) (くろしお出版)

沼田 善子(二〇〇〇)『日本語の文法2 時・否定と取り立て』(3 とりたて) (岩波書店)

半藤 英明(一九九六)『古典語および現代語助詞』(こそ)の機能—他助詞との相互承接を中心として—『成蹊国文』第29号

宮地 朝子(二〇〇三)『係助詞と係結びの本質』(新典社)

「係助詞シカの成立—(其他否定)の助詞の歴史の変遷に見る—」『名古屋大学国語国文学』第81号

(一九九九)『とりたて』形式の構文的特徴と意味機能—とりたてて詞と係助詞—副助詞

— 『日本語論究6 語彙と意味』(和泉書院)

(二〇〇〇) 「方言からみたシカの構文的特徴と成立過程」『国語学』第51巻第1号

森田 良行 (二〇〇二) 『現代日本語講座 第5巻』・「日本語の助詞・助動詞」(明治書院)

山口 堯二 (二〇〇〇) 『構文史論考』(和泉書院)

山田 孝雄 (一九三六) 『日本文法学概論』(宝文館)

(付記) 本稿は、平成一五年度熊本・大学国語国文学会(平成16年1月24日(土)、於、熊本大学)での口頭発表を成稿化したものである。